

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

住所 北海道札幌市中央区北3条西7丁目

管理機関名 北海道教育委員会

代表者名 教育長 佐藤 嘉大

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

2019年 5月29日（契約締結日）～2020年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 北海道登別明日中等教育学校

学校長名 吉村 教賢

類型 グローカル型

3 研究開発名

AKB Future Project 2nd Stage ～北海道と世界の明日を創る

4 研究開発概要

高齢化社会が進行する日本において、地域を活性化し、あらゆる年代が住みやすい環境を整えることが必要である。地域をフィールドとして、関係機関と連携し、社会課題の解決に向けた学びを深め、解決法を提案、そして実践することで、地域への理解や愛着が深まり、主体的に考え行動する力を身に付けた地域人材を育成する。

3回生の「世界と日本・北海道のつながり」を通してSDGsについて学習し、4回生以降の課題探究は、SDGsの視点と関連させて探究活動を進める。5～6回生では、課題探究の取組の深化を図るとともに、自己のキャリアデザインを確立させる。

5 教育課程の特例の活用の有無

なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム				○								○
運営指導委員会							○					○

※3月の予定は新型コロナウイルスの影響により中止

(2) 実績の説明

ア コンソーシアムの構成について

機関名	機関の代表者名
北海道教育庁胆振教育局	教育支援課長 竹内 結美
胆振総合振興局	地域政策課長 水井 敬介
登別市	総務部長 佐藤 紀清
登別市教育委員会	教育部長 堀井 貴之
登別市社会福祉協議会	地域福祉係長 坂本 大輔
登別商工会議所	専務理事 高田 明人
登別国際観光コンベンション協会	専務理事 大野 薫
室蘭工業大学	理事副学長 溝口 光男

イ 海外交流アドバイザーの配置について

- ・株式会社 I S A 札幌支店 明山 崇 氏に依頼し、配置した。
- ・プロジェクトマネジメント講習では、ワークショップ形式により、海外フィールドワーク参加生徒・引率教員に対する助言やケーススタディを実施した。異文化理解や安全管理といった生活に関するものの他、生徒個々の研修プランに対する助言があった。

ウ 地域協働学習実施支援員の配置について

- ・登別中央福音教会主任牧師 高橋 敏夫 氏に依頼し、配置した。
- ・第1回コンソーシアム会議に先だって打合せを行った。また、第1回コンソーシアム会議において、事業の概要、ロジックモデル及び今後のスケジュールについて説明するとともに共有を図った。

エ 管理機関による主体的な取組について

- ・海外の高校との交流事業の展開など、ICTの環境を整備するとともに教員の加配を行った。
- ・第1回コンソーシアム会議において、事業の概要、ロジックモデル及び今後のスケジュールについて説明し、共有を図った。
- ・第1回運営指導委員会において、事業の概要、令和元年度上半期の活動及びロジックモデルについて説明し、共有を図った。
- ・5回生キャリア課題探究成果発表会及び4回生プロジェクトマネジメント講習についての活動を視察後、運営指導委員会において協議を行った。
- ・総合的な探究の時間（地域課題探究、キャリア課題探究）の充実に向けた指導・助言を行った。
- ・グローバルな視野を醸成する取組（ICTを活用した海外の高等学校等との交流授業、海外フィールドワークなど）への指導・助言を行った。

オ 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・本校と地域との連携，課題探究への活用については，AKB Future Project 委員会を中心に実践を進めており，事業終了後も継続できる見通しである。
- ・コンソーシアムに関しては，次年度以降の運用を通してコンソーシアムの体制の在り方の構築と改善を図る。また，事業終了後の運営主体を早急に決定する必要がある。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
4回生「社会と情報」における「地域課題探究」	2回	2回	2回	2回	2回	2回	4回	2回	2回	1回	2回	4回
5回生「家庭基礎」における「キャリア課題探究」	2回	2回	2回	2回	2回	2回	4回	2回	2回	1回	0回	4回

※3月の予定は新型コロナウイルスの影響により中止

(2) 実績の説明

ア 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

(ア) 地域課題探究（対象：4回生（高校1年生相当））

- ・社会と情報及び総合的な探究の時間において，地域課題探究を実施した。
- ・前年度末に学んだSDGsと地域に関する知識を踏まえ，地域課題を発見し解決策を探究する活動を実施した。胆振地域や北海道内の地域フィールドワークを実施したことで，地域課題に対する当事者意識を涵養し，課題解決に向けた行動力の育成を図った。
- ・課題解決に向けて実際に行動を起こすプロジェクト型探究に向けた事前指導として，プロジェクトの計画・実現に関わる講演を実施した。
- ・地域の課題について，持続可能な社会の視点を持って学びを深め，課題解決のための方策を考え，その方策を実施した。
- ・他校生（札幌開成中等教育学校等）との課題探究交流を実施し，コミュニケーション能力や，課題探究についての考察等を深化させた。
- ・地域協働学習実施支援員のコーディネートにより，生徒の探究テーマを踏まえて行政・民間企業やNPOとの連携を広げた。
- ・生徒は，各自のテーマについてレポートを作成した。
- ・コンソーシアムで連携している機関などから講師を招き，講演会やワークショップなどを実施し，生徒の課題探究に関する助言や指導をいただく機会を設けた。
- ・10月までの地域課題探究を踏まえ，新たに設定したテーマで探究活動を開始した。テーマ設定の際は，5つのユニットに分類した地域の課題及びSDGsの世界の課題との関連付けを意識して行った。4回生の10月から始まるキャリア課題探究は，5回生にかけて継続して実施する。

(イ) キャリア課題探究（対象：5回生（高校2年生相当））

- ・総合的な探究の時間を主として，前年度までのSGH課題研究を踏まえ，生徒各自が設定したテーマについて，キャリア課題探究を実施した。
- ・4回生での課題探究の経験をもとに，各生徒のキャリアデザインをさらに促すため，各生徒が，自分の興味・関心などに基づいたテーマを設定した。
- ・胆振地域や北海道内の地域フィールドワークを実施した。

- ・12月に実施するアメリカ・カナダ研修において、姉妹校やワシントン大学等の学生と英語を使った課題探究交流や文化交流を実践した。
 - ・生徒は、各自のテーマについてレポートを作成した。
 - ・コンソーシアムで連携している機関などから講師を招き、講演会やワークショップなどを実施し、生徒の課題探究に関する助言や指導をいただく機会を設けた。
- (ウ) 総合的な学習の時間（対象：3回生（中学3年生相当））
- ・「世界と日本・北海道のつながり」において、SDGsについて分担して学習することで世界の課題と目標に関する知識を身に付けた。また、SDGsを地域課題と結び付けて考えるワークショップを実施した。この取組により、持続可能な社会づくりの視点を育成し、次年度からの地域課題探究の基礎とすることができた。
- (エ) 外国語教育に関する取組
- ・4回生全員が、地元の小学校の英語の授業において教師役を務めた。生徒が教える側に立つことで、聞き手に配慮しながら、理解しやすい説明をしようとする意識が高まった。
 - ・後期課程の全ての生徒が、オーストラリアニューサウスウェールズ州アーミデール高校の日本語履修クラス（中学2年生～高校2年生相当）と計10回、オンライン会議を行った。習得した英語を活用することで英語学習に対する意欲を高めるとともに、即時性を意識した質問や応答などのコミュニケーション能力の大切さを意識付けることができた。
 - ・5回生全員が外国語科の授業の一環として、英語による動画を作成した。この取組により、「ふるさとや北海道について日本語や英語で世界の人に紹介できる」というアウトカム項目の実績が上昇したと考えられる。
 - ・5回生全員が、カナダ（バンクーバー）及びアメリカ（シアトル）の教育機関において海外研修旅行を行った。研修先では、キャリア課題探究の成果を英語で発表し、意見交換を行った。これまでの取組で身に付けたグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等の力を実践する場としての位置付けで行った。
 - ・4、5回生の希望者を対象に、イングリッシュキャンプを実施した。イングリッシュキャンプでは、多様性を尊重する意識を高めるため、海外からの留学生を交えて行った。倶知安町において、観光資源の活用についてフィールド調査を行い、その結果について英語で発表及びディスカッションするなど、今年度は地域課題の視点を取り入れて実施した。
 - ・短期、長期を合わせて4カ国17名（タイ5、アメリカ10、カナダ1、インド1）の留学生を受け入れた。
- (オ) 地域フィールドワーク（対象：4、5回生（高校1、2年生相当））
- ・インターネットや文献調査、校内ヒアリング、伴走教員との面談による情報収集に基づき、生徒自身がフィールドワーク先を探した。
 - ・登別市役所や登別市社会福祉協議会などのコンソーシアム構成団体と連携し、多くのフィールドワーク先を紹介していただくことができた。
 - ・フィールドワークの受入先は、コンソーシアム構成団体をはじめ、50以上の団体や個人であった。コンソーシアム構成団体以外の受入先の内訳は、官公庁5、業界団体2、民間団体4、社会福祉団体6、研究・教育機関10、観光地4、ホテル旅館3、民間の事業所13、地域人材5である。
 - ・生徒の主体性を伸ばすことを目的にしているため、フィールドワーク先とのアポイントメントは生徒自身が行い、フィールドワークは原則として引率教員が付かずに行った。
 - ・4回生75名（3～5名の24班）、5回生77名（個人探究を基本とする63班）全員が参加し、多くの生徒が複数回実施した。

(カ) 海外フィールドワーク

- ・以下の日程及び内容で実施した。

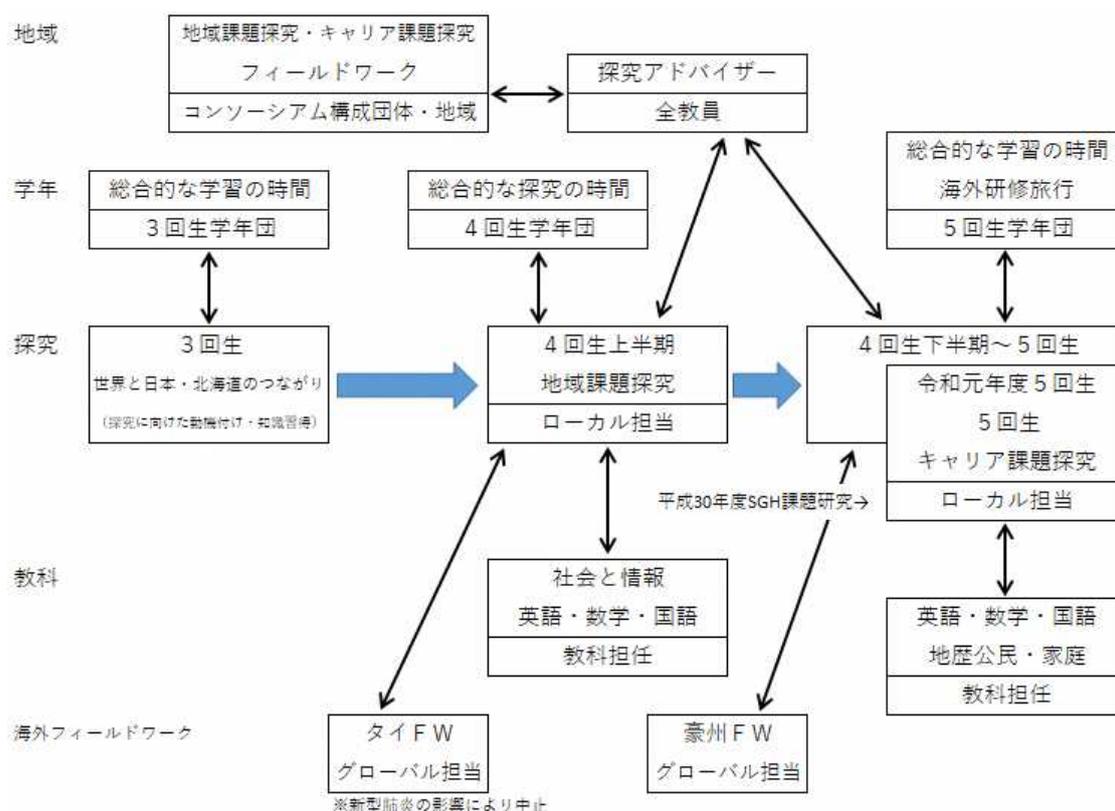
日程等	内容
<p>【日程】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年 11 月 5 ～15 日 <p>【参加者】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5 回生 3 名 <p>【フィールドワーク先】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリア 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外フィールドワークの成果を， 5 回生で実践中のキャリア課題探究のフィールドワークと比較・分析して活用できるようにするため，地域のフィールドワークのテーマをもとに生徒を選抜した。 ・ 研修プログラムは，参加生徒のテーマをもとに設定した。 ・ 帰国後，研修先で得た知見をもとに登別市役所職員を招き，発表と意見交換を行った。
<p>【日程】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 令和 2 年 2 月 1 ～ 8 日 <p>【参加者】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 回生 3 名 <p>【フィールドワーク先】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外フィールドワークの成果を， 4 回生で実践中の地域課題探究のフィールドワークと比較・分析して活用できるようにするため，地域のフィールドワークのテーマをもとに生徒を選抜した。 ・ 研修プログラムは，参加生徒のテーマをもとに設定した。 <p>※新型コロナウイルスの影響により，渡航を断念した。</p>

イ 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

- (ア) 3 回生（中学 3 年生相当）：総合的な学習の時間
- (イ) 4 回生（高校 1 年生相当）：社会と情報（情報収集，データ処理，情報発信），総合的な探究の時間
- (ウ) 5 回生（高校 2 年生相当）：現代文 B（論文要約，レポート作成，スピーチ），世界史 A（SDGs，世界の諸問題），家庭基礎（食や生活に関わる地域の課題），総合的な学習の時間

ウ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

- ・ 国語，数学，外国語の授業において，スピーチ及び討論の方法や，「CiNii」の検索及び活用の方法など，探究の基礎，探究リテラシーに関係する指導を行った。
- ・ 地歴公民，保健，家庭及び情報において，それぞれの分野の授業内容に応じて世界との比較を行った。
- ・ 家庭の授業において，地域食材であるマツカワガレイを扱った調理実習及びレシピの開発を行った。



エ 成果の普及方法・実績について

(ア) 課題探究に関する成果の共有

- ・「『探究の授業』を探究してみよう」をテーマに札幌で実施した研修において、主体的なテーマの設定方法について、本校における実践と具体的な生徒のテーマを全道から参加した教育関係者及び行政関係者と共有した。
- ・オンライン会議の取組として、「マイプロジェクトパートナー探究勉強会」を実施した。進路指導と探究活動の関連性について、本校における実践を全国からオンラインで参加した教育関係者と共有した。
- ・福島県立磐城高校とのオンライン会議を行い、進路指導と探究活動の関連性及び課題探究を推進する際の校内の連携体制の構築の在り方について情報を共有した。

(イ) ウェブサイトを活用した情報共有

- ・本校のウェブサイト上に本事業に関わるページを開設し、課題探究の実践に関する情報と使用した資料を掲載している。

オ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制について

- ・分掌を超えたカリキュラム・マネジメント推進委員会を組織し、カリキュラム開発を進めている。

カ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割，それを支援する体制について）

(ア) AKB Future Project 推進委員会

- ・SGH指定の5年間グローバル活動や課題研究を推進してきた委員会を継続し、本事業についても研究開発を進めている。
- ・グローバルな分野と課題探究を中心としたローカルな分野それぞれにおいて、担当教員を配置している。

(イ) ウェブサイトを活用した校内における情報共有

- ・本校ウェブサイト上にアップした課題探究の実践に関する情報と使用した資料を閲覧することで、取組の進捗状況を把握できるようにしている。

キ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じて、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・「AKB Future Project 推進委員会」において研究開発を進めるとともに、生徒や教職員、保護者への意識調査などにより本事業の取組内容の検証・評価を行っている。
- ・「AKB Future Project 推進委員会」を開催する度に、目標設定シートの達成状況について、具体的な数値を示して確認している。

8 目標の進捗状況，成果，評価

(1) アウトカム

アウトカム項目	実績	目標
ふるさとや北海道について日本語や英語で世界の人に紹介できる	80.4%	100%
諸外国の人々との交流，異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まる	90.5%	100%
将来，地元での就業を希望する生徒（北海道内）	13.5%	60%
※将来，地元での就職も視野に入れている生徒（北海道内）	※73.6%	
将来，地方創生に関わる仕事への就業を希望している生徒	24.3%	50%
※将来，地方創生に関わる仕事への就業も視野に入れている生徒	※87.8%	
課題研究活動を通じて，地元への理解が深まる	83.8%	80%
物事を考えるときに，必要なデータや情報を探することができる	66.9%	80%
※「情報収集をすることができる」のみを回答した生徒	※93.9%	

- ・生徒は積極的にフィールドワークを行っており，地域の課題等への理解が深まっている。
- ・既に志望動機が定まっていたり，道外での就業を希望したりする生徒については，将来，地元での就業，地方創生に関わる仕事への就業を希望しないと回答した（4.7%，7名）。本校は開校以来，外国語教育・グローバル教育を推進していることから，国外に目を向ける生徒が多いことも一因であると考えられる。
- ・将来，地元での就業，地方創生に関わる仕事への就業を視野に入れている生徒は目標数値を上回っている。課題探究では全ての生徒が地域でのフィールドワークを実践しており，その経験から地域での就業をイメージできる生徒が増えたものと考えられる。

(2) アウトプット

アウトプット項目	実績	目標
課題研究に関する検討会議の開催回数	7回 (70.0%)	10回
課題研究に関する研究授業の実施回数	1回 (25.0%)	4回
先進校としての研究発表回数	4回 (80.0%)	5回
地域課題解決のための行動を起こした生徒 (※生徒自らがプロジェクトを企画運営した人数)	13人 (43.3%)	30人
コンソーシアムの構成団体数	9団体 (128.6%)	7団体
地域課題探究または発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況	延べ 95人 (633.3%)	15人

コンソーシアムの活動回数 ・ 第一回コンソーシアム会議（7月30日） ・ 第二回コンソーシアム会議（3月7日） ※新型コロナウイルスの影響で中止	1回 (50.0%)	2回
海外からの旅行者への英語による観光案内ができる生徒数	95人 (271.4%)	35人

- ・ 外部人材の活用に関しては目標を大きく上回っていることから、地域が好意的に協力する状況を作り出すことはできていると考えられる。
- ・ 「地域課題解決のための行動を起こした生徒」には、既存の活動に参加するものは計上せず、生徒が主体的に企画・立案したものを計上している。設定した目標である「30人」には到達していないが、今年度の生徒と地域との積極的な関わりから、本事業が2年目、3年目と進むにつれて生徒が主体的に企画・立案して地域の課題解決の活動に参画する生徒は増えることが期待できる。2020年7月に登別市市制50周年事業と連携して実施される、期間限定で開設される道の駅では、「『道の駅』プロジェクト」に携わっている生徒を中心に、他の生徒も多数巻き込んで、道の駅開設に係る個々のプロジェクトに取り組む予定である。
- ・ 安心安全なフィールドワーク体制の構築に努めるとともに、生徒の内発的動機付けからテーマを設定するように指導した結果、課題探究を自分事として捉え、興味を持って積極的に探究を進める生徒が多くなった。自分自身の関心に基づくテーマを設定した生徒ほど、積極性が高い傾向が見られた。課題探究に対する意欲の高さは、10月に実施した意識調査に表れている。

【調査項目】「探究活動に対するモチベーションについて」

	すごく楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	全く楽しくない
4回生	62.2%	31.1%	2.7%	4.1%
5回生	61.1%	34.7%	2.8%	1.4%

9 次年度以降の課題及び改善点

ア 課題探究における地域課題の「5つのユニット」について

- ・ 指導の効率化を目的に「5つのユニット」を設定したが、生徒の探究テーマが想定以上に多様なものとなり、「5つのユニット」の枠に収まらなかった。複数のユニットを横断するテーマや、ユニットに該当しないテーマも散見し、ユニットを再検討する必要が生じた。
- ・ 2020年度も「5つのユニット」を継続し、生徒の探究と地域を接続する指標として活用する。但し、少子高齢化以外の福祉分野や、教育・環境分野の充実を図るため、「少子高齢化、防災、産業、医療、観光」の5つのユニットを「防災、産業、医療、福祉、循環型社会」に再編する。

イ コンソーシアムの構築について

- ・ 生徒が主体的に課題探究に取り組み、地域と協働して課題探究を進めることには成功したが、現時点では個々の探究班と地域との連携に止まっている。
- ・ コンソーシアムを構成する団体の中で、本事業に係る意識の差が大きい。2020年度に実施できる見込みである「『道の駅』プロジェクト」を成功させることで、本事業が地域と生徒に及ぼす影響を視覚化するとともに、ロジックモデルで論理的に意義付けることで、コンソーシアムを構成する団体を巻き込み、コンソーシアムの在り方について改善を図りたい。

ウ ロジックモデルについて

- ・ 登別市役所から、「地域への効果（アウトカム）をイメージするのが難しい」という指

摘があった。将来のUターンや交流人口増加を加筆したが、「理屈では理解可能であるが、遠い未来のことであるためイメージしにくい」との評価であったため、改善の必要がある。

- ・ロジックモデルの活用とフィードバックを行った登別市役所との関わりについての事例を挙げるなどして、ロジックモデルについて説明することで、地域と協働しての探究活動がより活発化することが考えられる。次年度は、ロジックモデルそのものを改善するとともに、ロジックモデルで示したアウトプットやアウトカムを実現することで、ロジックモデルの実用性を高めたい。

エ 地域リーダーの育成について

- ・ロジックモデルにおいて、地域リーダーに必要な力を「協働する力・課題発見解決力・巻き込み力」と定義したが、生徒の探究が上半期で終了した今年度は「課題発見」に留まるケースが多かった。
- ・2020年1月現在、課題探究から始まった複数のプロジェクトが進んでいるため、地域と協働するプロジェクトを増加させるため、今年度の成功事例を他の生徒への動機付けに活用する。
- ・生徒の準備不足等により、上手くいかないプロジェクトもあったため、次年度は課題設定やプロジェクトに失敗した生徒のフォローアップ機能の充実を図り、失敗を生徒のレジリエンス育成の機会として活用できるようにする。

オ 海外フィールドワーク訪問先の変更について

- ・シンガポールは出生率の低下や少子高齢化など、我が国と同様の課題を抱えており、観光重視の政策は北海道や登別市と共通している。また、海外研修先との比較・検討した成果を地域課題の探究に還元するために、地理的・文化的にも我が国と近いシンガポールを、4回生の海外フィールドワーク先をシンガポールに変更する。

カ その他

- ・PBL型の地域探究を推進していく上で、生徒の活動を実現するための財源確保が課題となる。助成金やクラウドファンディングを活用することで解決できると考えられるため、資金集めが目的化しないよう指導し、生徒が成長する活動の在り方を構築する。

【担当者】

担当課	学校教育局高校教育課	T E L	011-204-5764
氏 名	今井 真	F A X	011-232-1108
職 名	主任指導主事	e-mail	imai.makoto2@pref.hokkaido.lg.jp